

月刊

地域保健

10
2014

●特集

地域包括ケアシステムの構築に向けてPART.2
—市町村保健師の役割を中心に—

●フロントランナー

飯山明美さん《本別町 地域包括支援センター 所長補佐》

●ピープル

新澤克憲さん《ハーモニー（就労継続支援B型事業所）施設長》



6

特集

地域包括ケアシステムの構築に向けて PART.2

～市町村保健師の役割を中心に～

- 8 【概論】生活モデル化する地域社会と保健師
- 14 【埼玉県川越市】住民に聴いて、仲間に聴いて、みんなで築く地域包括ケアシステム
- 20 【静岡県掛川市】総合的な在宅支援を目指す「ふくしあ」の活動
- 28 【奈良県大和高田市】地域包括ケアに保健師はどう関わるか
- 34 【奈良県生駒市】介護予防から地域包括ケアへ
- 40 【長崎県佐々町】3,000 人の高齢者に 3,000 通りの地域包括ケアを

1

フロントランナー 飯山明美さん（本別町 地域包括支援センター 所長補佐）

48

REPORT・1

日本看護協会「統括保健師人材育成プログラム」前期集合研修

52

REPORT・2

『隣の人』上映会&トークライブ

60

隔月連載

東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは《第4回》
《対談》佐々木亮平、岩室紳也

80

ニュース

97

ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！

菅原成美さん（鶴居村役場 保健福祉課 健康推進係）

102

ピープル

新澤克憲さん（ハーモニー〈就労継続支援B型事業所〉施設長）

連載

66 保健師のための閑話ケア《第46回》

藤本裕明

70 中臣さんの 環境衛生ウォッチング《第31回》

中臣昌広

75 いまどき子育てアドバイス《第205回》

中川信子

情報BOX

81 ……訪問に役立つ“安心・安全”の豆知識、BOOK、月間リーダー、
information、月間リーダー special edition?

北海道中川郡
本別町

飯山明美 さん

● 本別町 地域包括支援センター 所長 補佐



「もの忘れ散歩のできる町」本別だからこそできることを考える

既存の枠、全国の枠にとらわれず、新しい事業を創りたい

北海道の広大な自然と、豊かな大地に囲まれた本別町^{ほんべつ}は、十勝の東北に位置している。町の中心から少し離れると、大豆やサトウダイコン（テンサイ）、小麦などの畑が広がり、北海道らしい風景が展開する。木材加工や農産物加工など第二次産業も盛んだ。そんな本別町で生まれ育った飯山明美さんにお話を伺った。

保健師として、雑誌に掲載されるような活動を

「子どものころ、本別町の勇足^{ゆうたり}地域に



駐在所があつて、保健師が一人常駐していたんです。当時、保健師は住民にもなじみの職種で、心配事をちよつと相談に行ける場所だったのだと思います。父から保健師になりなさいと強く勧められていましたね」

飯山さんが高校生になるまで、実家は農業に従事。豆、サトウダイコン、ジャガイモを作っており、牛や鶏も飼っていた。しかし、外遊びはあまり好きではなく、絵を描くなど室内で遊ぶ物静かな子どもだった。

「何になりたいか分からなくて、親の勧めるままにやってみようと、帯広高等看護学院に進みました」

看護科、保健婦科（当時の名称）を卒業し、どちらも免許を取得した。在学中の看護実習、卒業後1年間の本別町国民健康保険病院での臨床看護経験を通して、こう感じたという。

「臨床看護は入院中にどれだけケアができるかが問われます。短期間でテキ



本別町地域包括支援センター前には、サトウダイコン畑が豊かに広がる（上）。道の駅「ステラほんべつ」には大豆をはじめ、さまざまな種類の豆が並び（左上）。本別町を見下ろす丘からの眺めは、町の周りの畑が美しい（左下）



地域包括 ケアシステムの構築に 向けて PART.2

市町村保健師の役割を中心に

地域包括ケアシステムの構築に向けて、医療・保健・介護などの各分野が動き始めている。今後は文字通り複数の分野をいかに“包括的につなぐ”かが問われることになる。保健を中心に“つなぐ”ことに一日の長のある保健師にとっては力を発揮するチャンス到来ともいえる。しかし、全体像がなかなか見えてこない中で当惑している向きもある。

今月は8月号の座談会に続く、地域包括ケアシステムの特集第2弾。保健師の役割を概論で考察するとともに、地域包括ケアシステムの構築に積極的に関わっている市町村の事例を取り上げる。

P8 【概論】生活モデル化する地域社会と保健師

◎猪飼周平（一橋大学大学院社会学研究科）

P14 住民に聴いて、仲間に聴いて、 みんなで築く地域包括ケアシステム《埼玉県川越市》

◎佐藤尚美（川越市福祉部高齢者いきがい課）

P20 総合的な在宅支援を目指す「ふくしあ」の活動《静岡県掛川市》

◎岡田美穂（掛川市西部地域健康医療支援センター）

P28 地域包括ケアに保健師はどう関わるか《奈良県大和高田市》

◎佐藤博美（大和高田市保健部地域包括支援課）

P34 介護予防から地域包括ケアへ《奈良県生駒市》

◎田中明美（生駒市福祉部介護保険課）

P40 3,000人の高齢者に3,000通りの地域包括ケアを《長崎県佐々町》 〈取材協力〉◎江田佳子さん（佐々町地域包括支援センター）



概 論

生活モデル化する
地域社会と保健師

地域包括ケア政策と付き合っゆくために



一橋大学大学院社会学研究科

猪飼周平

(いかい・しゅうへい 教授)

保健師が地域包括ケアシステムと向き合うためには何が必要か。多職種が参入する中で、保健師の立ち位置はどうなるか。医療政策の専門家の目から整理する。

1 地域包括ケア政策は
何のために

現在「地域包括ケアシステム」に関する政策が本格的に推進されている。主たる実施主体とされている市町村では、地域差もあるだろうが、この政策とどのように付き合っていけばよいのか、悩んでいるところも多いようである。そもそも地域包括ケアとは何であり、またなぜ地域包括ケア化する必要があるのか、さらに、地域包括ケアシステムを構築することでどのような政策目標を達成すればよいのか、これらのことが、地域包括ケア政策においては説得的に示されていない。

市町村や市町村に所属する保健師の間では、地域包括ケア政策として何をしようかが分からず、困惑が広がっている。聞いてはいるが、その理由は、まさに政策の目的や中身が確定していないことに最大の原因があるといえ

う。

そこで、本稿では、まず、地域包括ケアが何であり、何のために必要となるのかについて、私なりに整理してみたいと思う。その上で、地域包括ケアにおける保健師の意義について考えることにしたい。

2 地域包括ケア化は
ケアシステムの
世紀的な転換である

地域包括ケアが、これまでのケアシステムに比してより地域的かつより包括的なケアシステムである、ということとは間違いない。実は、このことだけでも、ケアシステムの在り方に極めて大きな変化をもたらすものであるということが理解できる。というのも、20世紀を通じてケアシステムは、地域包括ケアとは正反対の方向を向いていたからである。

すなわち、20世紀を通じて、日本を

含む先進諸国の医療は、病院／診療所の二元的構造を基本とする施設ケアによって特徴付けられてきた。また、20世紀を通じて、ケアシステムは保健、医療、福祉のうち医療・治療部分だけが突出することで互いに密接な連携のないままであり続けた。その意味で、地域包括ケア化は、この20世紀的な歩みを反転させるということであり、まさに歴史的なケアシステムの転換を意味しているのである¹⁾。

3 地域包括ケアの
根拠としての
生活モデル化

ただ、それほど大きな転換であるのなら、そのような転換がどうしても必要となる特段の理由が示されるべきであろう。ところが、実のところ地域包括ケア政策においては、ケアの転換が必要となる説得的な理由が示されていないのである。もちろん、地域包括ケ

ア政策の推進に当たって、それは高齢化対策であるとして一応の説明が与えられているし、それで納得している人もいるかもしれない。

だが、実のところ、地域包括ケアは高齢化対策としては正しい政策とはいえない。その最大の理由は、地域包括ケアが、本質的にケア効率を上げる政策ではないことから、少なくとも高齢化による財政の逼迫や、経済の停滞という問題の解決には寄与しないためである²⁾。つまり、地域包括ケア政策は高齢者向けの政策ではあっても、高齢化を乗り切るための政策ではないのである。

では、地域包括ケアシステムを構築するべき真の理由はなんだろうか。

ここで、地域包括ケアシステムには先駆が存在するということを思い出し、てみよう。戦後の地域医療の取り組みをみてゆくと、有名無名にかかわらずさまざまな方が、少数派ではあれ、事



村民を深く理解し、 地域に役立つ自分になりたい

すがわら なるみ

菅原成美さん

● 鶴居村役場 保健福祉課
健康推進係



文：白井美樹（ライター） 写真：C.Kent

鶴居村は、国の特別天然記念物タンチョウの生息地として全国的に有名な村。眼下には釧路湿原国立公園が広がり、広大な牧草地では乳牛たちがのどかに草をはんでいる。そんな美しい風景をたたえた鶴居村に、菅原成美さんが保健師として赴任してきて、今年で2年目になる。

広いフィールドで活動したかった

隣接する釧路市で生まれ育った菅原さん。保健師という職業への興味が芽生えたのは、地元の高校に通っていたときだったという。

部活の一環で、「放送局」というサークルに所属しており、みんなで映像作品を作ることになった。その題材は「高校生の妊婦体験授業」というもの。その際に、釧路市の保健師さんにインタビューをしたり、マタニティー教室に参加したりする機会を得たのだ。



▲「まだまだ未熟」と語る保健師2年目の菅原さん

「妊娠は病気ではありませんが、体が大きく変化するので、女性みんな戸惑うはずですよ。そういう女性たちが、楽しく健康的に妊娠期間を過ごせるように、保健師さんが力を注いでいる姿を見て、とても魅力的に感じました」

しかし、大学入学前は、看護師にな

るか保健師になるかで迷っていたという。そこで、当時のカリキュラムで両方の資格を取ることができた、北海道大学医学部保健学科看護学専攻課程へ進学する。

どちらになろうかという迷いを払拭したのは、大学3、4年のときに地域保健の実習に参加するようになったこ

人前で自分の経験を話すことは、
自分たちを変えていく大きな力になる。

豊かで、楽しくて、美味しくて、うれしい。そんな時間を大切にしたい。



ハーモニ（就労継続支援B型事業所）施設長

新澤克憲さん

聞き手 太田美由紀（ライター）



写真：カミヤス セイ、太田美由紀（111 頁レポートのみ）

東京都世田谷区に「ハーモニ」という就労継続支援B型事業所がある。ここでは、週に一度、利用者たちが抱えている精神疾患、幻聴や妄想、困っていること、病気のことなどを語り合うグループミーティングが行われている。そこから生まれた「幻聴妄想かるた」は、展示会やカルタ大会、講演会などを通じて、家族や一般の人たちの理解を深める楽しいアイテムとなった。施設長の新澤克憲さんにお話を伺った。

地域で生きることが 大きなテーマだと感じた

— 学生時代は教育学部の特設教育科で学んだそうですね。

新澤 父が歯科医、叔父が内科医だったので、医者以外はダメというプレッシャーもあったのですが、僕はそういう志向もなく、成績もそんなによくありませんでした。反発する前に父も亡くなったので、反対を押し切るまでもなく、なんとなく入った教育学部で特殊教育を学んだら、これが、面白かつ

た。僕自身がもともと「世界への違和感」を持っていたんだと思うんですけど、その感覚と重なる部分があったのかもしれない。

— 現場に出られたのはいつですか？

新澤 大学院のころ、介護指導員として、車椅子が必要な重度心身障害者のデイケアを非常勤で始めました。教育よりも福祉、特に、障害のある人の生活面に対する興味が強かったですね。当時は重度心身障害の人たちへの在宅支援があまりなく、養護学校を卒業し

PROFILE

● しんざわ・かつのり ●

1960年、広島生まれ。精神保健福祉士、介護福祉士。東京学芸大学教育学部特殊教育科卒業。大学院時代から重度心身障害者のデイケアにアルバイトとして勤務。30歳を機に退職し、障害のある人の家具作りを目指し木工職人を志す。95年、東京都世田谷区の共同作業所ハーモニ（現・就労継続支援B型事業所）の立ち上げに誘われ施設長に。1児の父。

て、これから社会に参加するという段階で、すぐに老後のことを考えなければなりません。つまり、親亡き後のことを考えて、地方の施設などを見学に行くという状況で、それにはショックを受けました。障害のある人たちが「地域で生きること」は、今でも僕のテーマの一つです。

そのころ、「青い芝の会」など、脳性まひを中心とした車椅子の人たちが、生活の自立を獲得するための運動